

- 145-149 (1956).
- 13) Josker, R. O. & Reed, M. R.: Assesment of body image organization of hospitalized and non-hospitalized subjects. *J. Project. Techn.*, 27, 185-190 (1963).
- 14) Jourard, S. M. & Secord, P. F.: Body size and body-cathexis. *J. Consult. Psychol.*, 18, 184 (1954)
- 15) Jourard, S. M. & Secord, P. F.: Body cathexis and the ideal female figure. *J. Abnorm. and Socio. Psychol.*, 50, 243-246 (1955).
- 16) Jourard, S. M. & Secord, P. F.: Body cathexis and personality. *British Journal of Psychology*, 46, 130-138 (1955).
- 17) Kagan, J. & Moss, H. A.: Birth to Maturity. in Werner, H. & Wapner, S. ed *The Body Percept*. 1 ed Witey: New York (1965).
- 18) Kane, J. E.: Personality, body concept and performance. in Kane, J. E. ed *Psychological Aspects of Physical Education and Sport*. 1 ed 91-127 Routledge & Kegan Paul: London and Boston (1972).
- 19) 北村晴朗: 自我の心理, 増訂版 140-141 誠信書房 東京 (1955).
- 20) Leath, P. F.: A study of the relationship between certain objective measures of body-image and a measure of motor performance on the stabilometer. unpublished masters thesis, University of Maryland (1966) in Clarke, D. C. & Clarke, H. H. ed *Research Processes in Physical Education, Recreation and Health*. 1 ed Prentice-Hall, Ink.: New Jersey (1970) より引用.
- 21) 松島宏他: Body cathexis と身体的不調についての一考案 日本体育学会第27回大会号 168 (1976).
- 22) Rosen, G. M. & Ross, A. O.: Relationship of body image to self-concept. *J. Consult. and Clinic. Psychol.*, 32 (1) 100 (1968)
- 23) Schwab, J. J. & Harmeling, J. D.: Body image and medical illness. *Psychosomatic Medicine*, 30, 51-61 (1968).
- 24) Secord, P. F. & Jourard, S. M.: The appraisal of body cathexis: Body cathexis and the self. *J. Consult. Psychol.*, 17 (5) 343-347 (1953).
- 25) Slon, W. W.: A study of the relationship between objective measures of body-image and performance on a selected test of motor abilities. unpublished masters thesis, University Maryland. (1963) in Clarke, D. H. & Clarke, H. H. ed *Research Processes in Physical Education, Recreation and Health*. 1 ed 353 Prentice-Hall, Ink.: New Jersey (1970) より引用.
- 26) Snyder, F. E. & Kivilin, J. E.: Women athletes and aspects of psychological well-being and body image. *Res, Quart.*, 46 (2) 191-199 (1975).
- 27) Snyder, E. E. & Spreitzer, E.: Correlates of sport participation among adolescent girls. *Res, Quart.*, 47 (4) 804-809 (1976).
- 28) Vincent, W. J. & Dorsey, D. S.: Body image phenomena and measures of physiological performance. *Res, Quart.*, 39 (4) 1101-1106, (1968).
- 29) White, W. E. & Wash, Jr. J. A.: Prediction of successful college academic performance from measures of body cathexis, self cathexis and anxiety. *Percept. Mot. Skills.*, 20, 431-432 (1965).
- 30) Zion, L. C.: Body concept as it relates to self-concept. *Res, Quart.*, 36 (4) 490-495 (1965).

身体像研究の意義

身体像について北村¹⁹⁾は「自己の身体は心理学的には単なる生物的生活体ではなく主観的な『私の身体』であり、人の経験界において特殊な位置を占めるものである。それは自己像の成素としての意味をもつ。そしてその身体像はその個人の身体運動の基準となることはもちろん、自己を顧みるときにはほとんど不可避免的に浮かび上がってくるものであり、従ってその人の社会的行動に於いても大きな役割を演じているものである」と述べ、身体像が自己概念のみならず個人の行動的側面にまで影響を及ぼすことを強調している。つまり、運動能力の向上は自らの行動によってのみ起り得るものであり、negativeな身体像がその行動を妨げ得るということはひいてはいよいよnegativeな身体像をもつという全くの悪循環を繰り返すのである。Kane¹⁸⁾は「身体像は動的なものであり、ただ単に自己の身体についての触覚的、視覚的、運動感覚的知覚の総和としてでなく、自己の知覚図式が絶えず新しい経験や活動によって影響される有機的なものとして考えられる。」と記述している。Reed²²⁾は競争的体育活動で常に敗者となる者は不安定な身体像をもち、多くの敗北経験がその個人の身体像や自己像にとって好ましくない影響を及ぼしていることを報告している。又KaganとMoss¹⁷⁾らの研究に於いても、自己の身体についての不安は長期に渡って継続し、ある種の身体経験に対する行動的態度と関係をもつことが指摘されている。

本研究で低い身体的能力をもつ者は普通もしくはそれ以上の者よりもnegativeな身体像をもっていることがわかった。そしてこの身体像が個人の自己像や行動的側面とかかわり合いをもつという多くの知見は、Bedford⁹⁾やZion³⁰⁾らも指摘するように、とりわけ種々の身体的活動を通して身体的成果と同様、心理・社会的成果をも期待する人々に強調されねばならない。つまり体育がphysical fitnessの向上を主要課題の一つとする以上に、その個人のtotal fitnessの向上をめざすという正に教育的目標にとって重要な意味をもたらしているからである。

要 約

初等教育専攻女子学生167名(19歳～20歳)を対象として身体像を運動能力との関係について検討した。

身体像の測度としてSecordとJourardが開発したBody cathexis scaleを用いた。運動能力の測度として文部省スポーツテストを用いた。

その結果、本研究の範囲内で次の結論を得た。

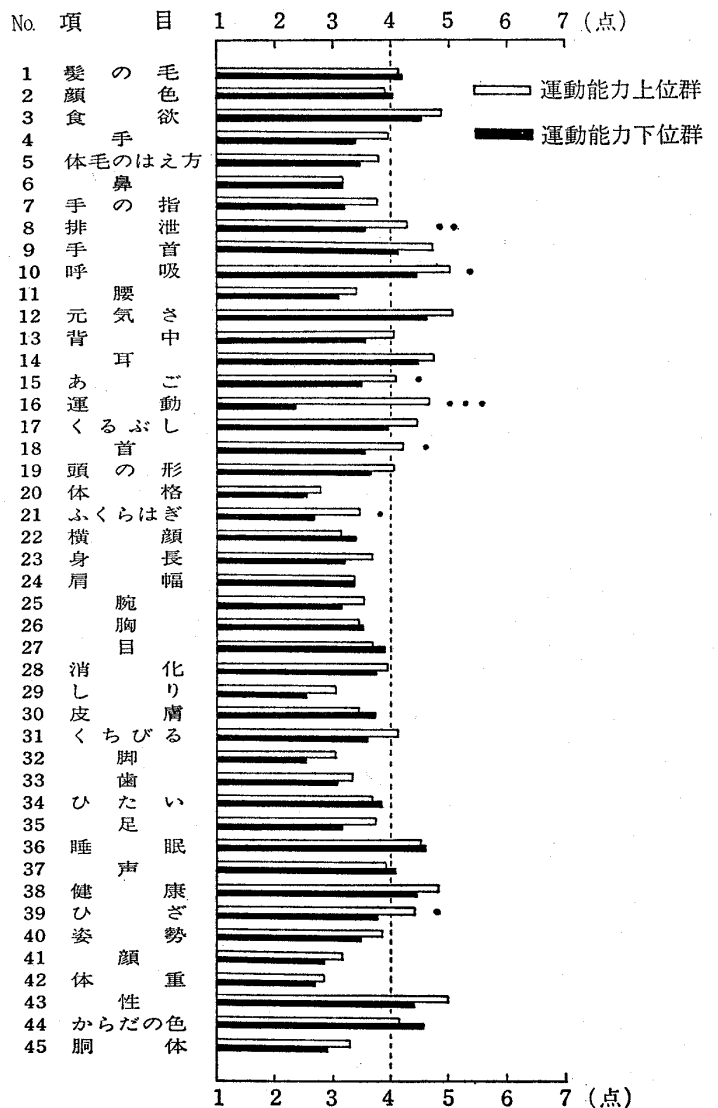
- 1 全般的にみて女子学生はややnegativeな身体像をもっていた。
- 2 特に形態に関する項目にnegativeな態度を示す傾向があった。
- 3 運動能力下位群は中位群及び上位群よりもnegativeな身体像をもっていた。
- 4 運動能力下位群は上位群よりも身体の機能に関する項目に比較的negativeな態度を示す傾向があった。

文 献

- 1) 秋本辰雄：催眠中のボディイメージ，成瀬悟策編 第1版 108-121 誠信書房，東京(1971)。
- 2) 相沢正男，太田哲男：Body-cathexis と Self-cathexis に関する研究 日本体育学会第28回大会号 193 (1977)。
- 3) Bedford, J.: Implication of body attitudes in teaching of physical education. *The Physical Educator*. 29 (2) 85-86 (1972)。
- 4) Clifford, F.: Body satisfaction in adolescence. *Percept. Mot. Skills*. 33, 119-125 (1971)。
- 5) Darden, E.: A comparison of body image and self-concept variables among various sport groups. *Res. Quart.*, 43 (1) 7-15 (1972)。
- 6) Fayk, A.: Introduction to the psychology of body-image. 国際心理学会発表抄録, IP-1-2-8, 290 (1972)。
- 7) Fisher, S. & Cleveland, S. E.: Personality, body perception, and body image boundary. in Werner, H. & Wapner, S. ed *The Body Percept.* 1 ed 48-67 Wiley: New York (1965)
- 8) Fisher, S. & Cleveland, S. E.: *Body Image and Personality*. 1 ed Princeton, N. J.: Van Nostrand (1958)
- 9) 藤田明男：中学生の身体像に関する研究 —Body cathexis と Body size concept について— 順天堂大学保健体育紀要 第17号 52 (1974)
- 10) Goldberg, B. & Folkins, C.: Relationship of body image to negative emotional attitudes. *Percept. Mot. Skills*., 39, 1053-1054 (1974)。
- 11) Gottesfeld, H.: Body and self cathexis of super-obese patients. *J. Project. Techn.*, 27, 186-190 (1963)。
- 12) Johnson, L. C.: Body cathexis as a factor in somatic complaint. *J. Consult. Psychol.*, 20 (2)

表3 B-C 得点の項目別群間の平均値の比較

項目	上位群 (N=43)		下位群 (N=44)	
	\bar{x}	S.D.	\bar{x}	S.D.
1. 髪の毛	4.12	1.62	4.16	1.43
2. 顔色	3.91	1.30	4.02	1.39
3. 食欲	4.86	1.37	4.55	1.52
4. 手	3.93	1.37	3.39	1.42
5. 体毛のはえ方	3.79	1.15	3.45	1.28
6. 鼻	3.14	1.32	3.18	1.50
7. 手の指	3.79	1.39	3.23	1.43
8. 排泄	4.30	0.99	3.59	1.30 **
9. 手首	4.72	1.20	4.16	1.48
10. 呼吸	5.02	1.18	4.41	1.24 *
11. 腰	3.40	1.33	3.09	1.44
12. 元気さ	5.09	1.34	4.64	1.40
13. 背中	4.09	1.27	3.59	1.09
14. 耳	4.74	1.27	4.50	1.36
15. あご	4.09	1.31	3.50	1.25 *
16. 運動	4.63	1.41	2.36	1.33 ***
17. くるぶし	4.44	1.12	3.95	1.24
18. 首	4.21	1.25	3.55	1.41 *
19. 頭の形	4.05	1.50	3.68	1.27
20. 体格	2.79	1.26	2.52	1.37
21. ふくらはぎ	3.42	1.62	2.68	1.34 *
22. 横顔	3.12	1.33	3.39	1.56
23. 身長	3.62	1.64	3.18	1.73
24. 肩幅	3.37	1.44	3.39	1.19
25. 腕	3.51	1.40	3.18	1.35
26. 胸	3.44	1.30	3.52	1.32
27. 目	3.67	1.73	3.91	1.90
28. 消化	3.91	1.44	3.73	1.52
29. しり	3.07	1.22	2.55	1.37
30. 皮膚	3.47	1.33	3.70	1.41
31. ちびる	4.16	1.42	3.61	1.53
32. 脚	3.05	1.45	2.55	1.28
33. 歯	3.33	1.72	3.11	1.78
34. ひたい	3.65	1.04	3.84	1.26
35. 足	3.76	1.65	3.18	1.47
36. 睡眠	4.51	1.44	4.61	1.63
37. 声	3.98	1.34	4.05	1.29
38. 健康	4.81	1.53	4.45	1.76
39. ひざ	4.42	1.33	3.77	1.22 *
40. 姿勢	3.88	1.50	3.50	1.36
41. 顔	3.16	1.40	2.84	1.26
42. 体重	2.88	1.42	2.70	1.47
43. 性	5.00	1.29	4.43	1.52
44. からだの色	4.16	1.29	4.59	1.47
45. 胴体	3.30	1.24	2.91	1.18

* $P < .05$ ** $P < .01$ *** $P < .001$ 

L-G よりも低い得点を示した項目は「髪の毛」, 「顔色」, 「鼻」, 「横顔」, 「肩幅」, 「胸」, 「目」, 「皮膚」, 「ひたい」, 「睡眠」, 「声」, 「からだの色」などの総体的にみて身体外観 (Body Appearance) に関するものであった。これは H-G は比較的機能性には恵まれているので, 身体美への指向性を示しているのかもしれない。

次いで本研究に於ける被験者群全体をみたとき, 45項目中30項目に絶対値で negative な評価を示しており, とりわけ形態に関する項目にその傾向が集中していた。これは中学生を対象とした藤田⁹⁾の結果や青年男女を対象とした Secord と Jourard²⁴⁾, Johnson¹²⁾, Clifford⁴⁾らの結果に於いても同様な傾向があり, 女性にとっては年令, 民族を問わず身体の形態部位に対する特徴的な態度を反映するようである。

ホ) 1000m持久走

2) Body cathexis scale

これは Secord と Jourard²⁴⁾ が自己の身体に対する態度を自己評定法により求める測度として開発した質問紙形式のものであり、身体像現象の測度としてその相対的妥当性¹³⁾と得点化の信頼性の理由で広く用いられている。これは各種の身体部位や身体機能に関連した45個の項目(表3)に対して7件法により、被験者の態度反応(満足度)を要求するものである。つまりここでいう身体像(Body cathexis)とは、各種身体部位や身体機能に対する満足・不満足の意味を意味する。

今回用いた尺度範囲は次の7段階である。

- (1) 非常に不満に思う
- (2) 不満に思う
- (3) やや不満に思う
- (4) どちらでもない
- (5) やや満足に思う
- (6) 満足に思う
- (7) 非常に満足に思う

3. 測定方法

いずれのテストも正課の授業時に測定を行った。

結果と考察

1. 結果の処理と群化

運動能力テストの成績は基準に基づき各個人の総合点を算出した。次いで運動能力テストの総合点から上位、下位25%づつを抽出し、それぞれを上位群(H-G)、下位群(L-G)、残りを中位群(M-G)とした。

Body cathexis 得点は各個人の総合点から算術平均値を求め、次いで各群の平均値及び標準偏差を算出した。

2. 運動能力の群間の比較

表1は運動能力総合点の群別標本数、平均値、標準偏差及び群間の比較である。t値は各群間で平均値の差の検定で得た値である。この結果、各群間とも全て0.1%水準で有意な差が見られた。つまり明らかにこれらの3群は運動能力に於いて異なる集団である。

表1 運動能力総合点の平均値、標準偏差と群間の比較

群と変量	N	\bar{x}	S. D.
(1) 上位群	43	57.1	5.36
(2) 中位群	80	42.9	3.97
(3) 下位群	44	30.2	5.05
(1) vs (2)		16.5335***	
(1) vs (3)	t	23.8193***	
(2) vs (3)		15.3103***	

*** $P < .001$

3. B-C の信頼性の検討

Spearman-Brown の公式を用いて奇偶折半法で信頼性の検討を行った。その結果非常に高い信頼性係数を得た。 $r = .985 (P < .001)$

4. B-C の群間の比較

表2は得られた B-C 得点の群別標本数、平均値、標準偏差及び群間の比較である。全体群の平均値は3.78±0.56でこの値は他の研究結果^{4,10,12,13,23,24,29)}と比して低い得点であった。

しかし日本人を対象とした研究結果^{2,9)}とはほぼ同値であり、身体に対する態度には社会・文化的差が存在するように思われる。

表2 Body cathexis 得点の平均値、標準偏差と群間の比較

群と変量	N	\bar{x}	S. D.
(1) 上位群	43	3.89	0.54
(2) 中位群	80	3.87	0.48
(3) 下位群	44	3.52	0.61
(1) vs (2)		0.2091	
(1) vs (3)	t	2.9586**	
(2) vs (3)		3.4770***	

** $P < .01$

*** $P < .001$

次に群間の比較を見ると、運動能力の高い群ほどB-C得点も高い傾向があるが、H-G と M-G 間には統計的に有意な差がなかった。しかし H-G は L-G よりも、M-G は L-G よりもそれぞれ有意な差で B-C 得点が高かった。つまり、運動能力に於いて低い能力の者は中程度以上の能力の者よりも自己の身体に対して、よりnegativeな態度を有していた。

この結果は Sloan²⁵⁾ のものと一致していたが、Vincent と Dorsey²⁶⁾ の結果とは異なっていた。これは後者の研究では被験者が男子大学生であることと用いた運動能力テストがバッテリーテストではなく握力と持久力の2つのテストで、しかもそれぞれの種目間の検討であることに起因しているのかもしれない。

4. 項目別群間の比較

表3は本研究で用いた B-C scale の項目毎の H-G と L-G 間の比較である。図1は得点を図式化したものである。この結果「排泄」、「あご」、「呼吸」、「運動」、「首」、「ふくらはぎ」及び「ひざ」の7項目に有意差が見られた。しかも全ての項目で L-G の方が H-G よりも低い値であった。

逆に、統計的には有意な差ではないが、H-G の方が

身体像の価値的次元に関する代表的なものとしては、身体に対する感情の研究がある。Secord と Jourard²⁴⁾ は、個人の身体に対する態度がいかなる包括的なパーソナリティ理論にとっても重大な意味をもつという主題に基づき自己の身体に対する情緒反応としての満足度を測定する Body cathexis scale を開発した。これは身体の諸部位や諸機能に関する数十個の単語から成り、それぞれの項目に対して最も positive な態度（満足）から最も negative な態度（不満足）までの範囲内で自己評定を求めるものである。

Secord と Jourard²⁴⁾ は男女大学生を対象に身体像 (Body cathexis, 以下B-C) と自己像 (Self cathexis) との関係を調べ、自己の身体に対する感情がその個人の自己像と有意な関係をもっているという研究結果を得た。これはその後、異なる対象群に於ける Jourard と Secord^{15,16)}, Clifford⁴⁾, Vincent と Dorsey²⁸⁾, Johnson¹²⁾, Rosen と Ross²²⁾, White と Wash²⁹⁾, 相沢²⁾らの研究でも同様な結果が得られている。

またこの関係が単に被験者の反応の構えによるものではないことも報告されている。²²⁾

さらにこの測度を用いて身体に対する態度が不安、抑うつ性などの精神的健康度と関係があることも検証されている。Secord と Jourard²⁴⁾ は大学生を被験者として Maslow の Security-insecurity Test による不安感情と B-C とに有意な負の相関を得た。Johnson¹²⁾ は平均年令20才の青年男女を用いて Cornell Medical Index による精神的健康度と B-C 間に有意な負の相関を、また Taylor の顕在性不安尺度による不安と B-C とに有意な負の相関を得ている。松島ら²¹⁾も B-C と Cornell Medical Index とに女子学生を用いて有意な負の相関を得た。さらに神経症者群と正常群には B-C 得点に於いて有意な差があったことを報告している。Goldberg と Folkins¹⁰⁾は男女大学生を用いて B-C と Multiple Affect Adjective Check List による Anxiety, Depression 及び Hostility とにいずれも有意な負の相関を見出ししている。

身体的異常と B-C との関係をみるために Schwab と Hormeling²³⁾ は男女の疾病患者を対象に調べ、その結果患者群は一般人に比してより negative な感情を自己の身体に対してもっていたことを報告している。同様に Josker と Reed¹³⁾ らも入院患者と一般人との間に有意な B-C 得点の差があったことを報告している。

身体的特徴と B-C との関係をみるために、Jourard と Secord^{14,15)} は体格をその変数として調べた。男性

では体重を除いてより大きなサイズを、女性では胸囲を除いてより小さなサイズを好む傾向があると結論した。Gottesfeld¹¹⁾ は超肥満の患者は低い B-C 得点をもっていることを報告している。藤田⁹⁾ は中学生を対象に身長、体重、胸囲と B-C との関係を調べ、男女とも身長とに有意な正の相関、女子の体重に有意な負の相関を得ている。また理想とする身体サイズと現実の身体サイズのずれの程度との間に有意な負の相関があることを見出している。

身体的特徴としての身体能力について Sloan²⁵⁾ は男子大学生の運動能力と B-C との関係を調べ、高運動能力群の方がより positive な身体像をもっていたとしている。一方、Leath²⁰⁾ は平衡能力と B-C との間には殆ど相関がなかったことを報告している。また Vincent と Dorsey²⁸⁾ は生理的パフォーマンスとしての握力及び持久走能力と B-C との関係を検討したが有意な相関を得ていない。

特別な身体能力を必要とするスポーツ集団加入との関係をみるために Snyder と Kivilin²⁶⁾ は女子インカレ選手を対象として B-C 得点を比較し、運動選手群が有意に高い B-C 得点をもっていたことを見出ししている。しかし運動種目間には有意な差を見出ししていない。同様に Snyder²⁷⁾ は女子高校運動選手が一般学生よりもより positive な B-C をもっていたことを報告している。Darden⁵⁾ は男子大学生の運動選手を用いて種目間の差を検討したが殆ど差がなかったと報告している。

以上みてきたように個人のもつ身体像が、その個人の自己像、種々のパーソナリティ側面、行動的側面及び身体的特徴と有意に関係することが示唆されている。

そこで本研究は厳しい体育的体験をする初等教育専攻女子学生を対象として身体的特徴の一指標としての運動能力と身体像 (Body cathexis) との関係をみようとしたものである。

研究方法

1. 被験者

千葉敬愛短期大学初等教育科に在籍する女子学生 167 名 (19歳~20歳)

2. 測度

1) 文部省スポーツテストの運動能力テスト

- イ) 50m走
- ロ) 走り幅とび
- ハ) ハンドボール投げ
- ニ) 斜懸垂腕屈伸

女子学生の身体像と運動能力との関係について

藤 田 明 男

A Study of Relationship between Body Image and Motor Ability of Female Students.

by Akio Fujita.

緒 言

体育は種々の身体的活動による「身体」の形態的・機能的変容をその主要課題の一つとしている。

従って、今日この対象としての「身体」に関する研究が幾つかの異なる研究分野でなされている。例えば、「身体」について、人体解剖学では、その構造的・機構的側面を、また人体生理学に於いてはその機能的側面に関する知見を提供している。しかしこれらの立場は「身体」を客体化した単なる物理的対象としてみているに過ぎない。これに対して「身体」を個人にとって有意味な実在としてみる立場がある。すなわちそれは「身体」を「心」との有機的枠組でとらえようとする心理学的立場である。

心理学の領域に於いて、自己の身体を個人が知覚する際、他の物理的環境にある対象物としてではなく独自の対象物として知覚することが指摘されている。^{7,8,19)}

そしてこの自己自身の身体に関する種々の知覚的体験を記述するとき、身体像 (Body Image) とか身体概念 (Body Concept) という用語が用いられる。

最初この身体像とか身体概念という用語は、精神病や脳障害などでみられるある種の臨床的所見を記述するために、神経学者や精神科医によって作られたものである⁶⁾。

従って、神経・精神医学の領域に於いては特に慢性の身体性疾患、精神分裂病や四肢切断により生ずる幻影肢現象、片麻痺に出現する身体像の歪みなどの身体像現象が個人のパーソナリティに及ぼす影響などについて研究されてきた¹⁾。

その後 Fisher と Cleveland^{7,8)} は正常人のパーソナリティに及ぼす問題として身体像をとり上げ、一連の

研究成果を基に身体像研究の意義を提唱している。このことはそれぞれ独自の方法で研究を進めている多くの研究者等によっても支持されている。^{2,4,12,16,22,28,29)}

Fisher は「増加している身体像研究から正常人の自己の身体に対する態度は、Identity に関する主要な側面を反映している。また身体の大小、魅力の有無、強弱といった個人的感情は自己概念や他人に対する特徴的な様式にとって多くのことを示している」と記述している。すなわち体育現象と密接不可分な関係をもつ様々な身体的特徴 (体格、体力、運動能力、身体的欠陥等) が個人の身体に対する態度に影響を及ぼし、さらにその個人の自己概念の形成とか行動的特徴といったものへの多大なる影響因子となり得ることが示唆されている。

近年、体育学の領域に於いても、身体活動や運動技能学習の基礎的要因とか、パーソナリティ要因としての身体像研究の意義が強調され、その実証的研究が異なる研究方法で進められてきている。^{3,5,9,18,20,21,25-28,30)}

文献考証

身体像現象に関する多くの測度や変数が提供されている。Vincent と Dorsey²⁸⁾ は身体像現象をとり扱っている諸研究を展望し、それらを3つの次元に分類している。それは、身体形態、空間位置に関する「感覚・空間次元」、実体性、現実性及び損傷性に関する「実存性次元」及び身体外観とか身体機能の価値に関する「価値的次元」である。

この身体像次元に関する概念的モデルは、身体像研究のための総括的説明や研究方法の選定に有用であるように思われる。ここではそれらの次元の中でとりわけ本論文とかかわりの深い「価値的次元」に関する文献について以下に展望してみる。